

KAWAII KEDO
SAIKYOU?

可愛いけど 最強っ

異世界でもぶもぶ友達と大冒険!

5

善 ありぼん 凶 中林すん

スノーラ

レンとルリの保護者。
本当は白い虎の魔獣だ
が人型にもなれる。
元・勇者の相棒。

カース

スノーラが以前住んで
いた森の守護者のカース
魔獣。人型にもなれる。

ルリ

珍しい青い鳥の魔
獣。レンとの連携
攻撃が得意。

ブロー

レンが誘拐された
先で友達になった、
闇の精霊。

レン

気が付くと二歳児の姿
で異世界にいた少年。
異世界生活を楽しむた
めに、悪の存在は許せ
ません。

アイス

レンの家族でモモツ
コルという魔獣。

Characters

登場人物紹介

第一章 絶対に器になんてならないよ!!

僕は長瀬蓮^{ながせれん}。普通の中学生だったんだけど、気がついたら、知らない森に一人でいました。しかも、二歳児の姿で!

これからどうなっちゃうか不安だったんだけど、スノーラっていう白い虎^{とら}の魔獣に拾われたり、弱っていた青い小鳥を助けてルリって名前をつけてあげたり……それで、二人と一緒に住むことになりました。

それからルストルニアの領主さんの所に引越して、領主のローレンスさん、奥さんのフィオーナさん、二人の長男のエイデンお兄ちゃんに、次男のレオナルドお兄ちゃん、ローレンスさんが契約している魔獣のバディーと一緒に暮らすことになったんだ。

それからは色々あって……モモツコルっていうもふもふ魔獣さんと契約してアイスって名前をつけて家族になったり……あとは、大人のみんがエンって呼んでるドラゴンさんとその子供のドラちゃんとお友達になったり、女神のルルリア様からハリセンを貰^{もら}ったり、冒険者の依頼をしたり。

ある日、僕達はスノーラの提案で、この国の首都ベルンドアに行くことになりました。

でも出発する直前に、僕とアイスはコレイションっていう悪い奴と、その仲間に誘拐^{ゆうかい}されちゃい

ました。

それは、ディアブナスっていう、世界をめちゃくちゃにしようとしてる奴を復活させるため。

一緒に誘拐されていた闇精霊やみせいれいのプロート、悪い奴らの所に潜り込んでいたハイエルフのユイゴさんのおかげで、そこからは逃げ出せたんだけど……ディアブナスは不完全だけど復活しちゃったみたい。

それで今は、やっぱり僕の体を奪うために、ルストルニアに攻めてきてるんだ。

あいつが完全に復活したら、世界が大変なことになるんだって。

絶対に止めない！

◇ ◇ ◇

一体どういうことだ。ここまでの間、何事もなく……いや、少々問題はあったものの、順調にきていたはずだ。

私、ディアブナスは、闇の精霊と子供を逃してしまい、復活までに時間がかかってしまったが、結局は取り込むことなく復活することはできた。

このあとは首都ベルンドアに向かい、闇の魔法の多くを取り戻す。その前に、この街を潰つぶし、あの子供を取り込もうと思っていた。

完全なる復活ではなかったが、以前よりも力に満ちている。これならばすぐにこんな小さな街くらい、消せると思っていたが――

あの子供に、ここまで邪魔をされるとは思っていなかった。

建物を壊し、子供達が地下へと落ちていったことまでは確認していた。

だが、いつから気配が消えていた？ いつ地上へ戻ってきた？

そしていつの間にか私に近づき、あの見たことがない武器で攻撃してくるなど考えてもいなかった。

闇の精霊と、ドラゴンの子供の気配を突然感じ、その姿を確認することはできた。だがその時点で、子供達の気配を感じることはできなかった。

当時の私は、魔法陣のせいで動きが制限されていたため、一定範囲しか周りを確認できなかった。その範囲外、どこか遠くに子供がいることも考えた。

それでも、子供達がバラバラに行動しているはずがないと思い直した。

つまり、私が気配を感じ取れないギリギリに隠れている可能性が高い。

なんとか闇の精霊を取り込み、その辺に隠れているであろう子供も取り込めば、問題は解決すると思っていた。

が、気づけば私は、いつの間にか私の後ろにいた子供達の攻撃を受けていた。

どうしてこの私が、こんな子供達に。

それにおかしなことは他にもある。

周囲の悪の力を集めることで上がっていた私の力が、途中から上がらなくなってしまったのだ。これが起こったのはいつか。

確か子供を地下に落とす少し前からだったか？ それまでは問題なく、どんどん上がっていた魔力が、急にながらなくなってしまったのだ。

おかしいと思いつながら、昔よりは力を得ていたため、そこまで問題には思わなかった。しかし今はどうだ。

魔法陣が不完全とはいえ、今の私をそう簡単に止めることはできない。できないはずだ。

それなのに傷を治すこともできず、大したことのない魔法を放ち、結界を張るだけでかなりの力を使っている。

それに、体が思うように動かない。

一体何が起きている？ なぜ急に、思い通りに事が進まなくなった？

考えながらも、私は次の行動に移ろうと、体を動かそうとした。

が、その時点で違和感を覚え、私はさらに奴らから距離をとり、そして自分の体を触ってみた。

『……そうか、原因の一つはこれか。コレクションめ。私に不良品の体を与えたか。まずはこれをどうにかするか』

早くしなければ。少しずつとはいえ、魔法陣が完成に向かっている。

私は子供を見た。

◇ ◇ ◇

我、スノーラは、風魔法を放ちながら、ドラゴン姿のエンの元へ移動する。

先程レン達と話していた、モヤモヤ——漏れ出していたディアブナスの魔力を、ハリセンで消していたということを伝えるためだ。

『何の話だった？』

エンが、魔法を放ちながら聞いてくると同時に、ユイゴ達も集まってきた。

我はすぐにレン達が見ていたものについて話した。

まさかレンが、ディアブナスの魔力が漏れていることに気づいていたとはな。先程までまったく分からなかったし、そんな気配はまったくしなかった。

それなのにレンは、初めからそのことに気づいていた。

そして時間が経つにつれ、レンの近くにいたルリ達も、それが見えるようになり、今では我と、アーティストまで見られるようになるとは思ってもいなかった。

それを聞いて、エンが大笑いする。

『ハハハッ！ まさか魔力が漏れていたことで、奴の力が上がらなくなっていたとは。奴自身も気

づかないほどの、魔力の漏れをレンが気づくか。やはりレンは面白いな。だがブローではないが、そろそろ奴もさすがに気づくであろう』

「そうだろうな。それだけ漏れていれば、いい加減気づくだろう。だからといって魔力の漏れを止めることは、そう簡単ではないはずだが」

ユイゴがそう言い、我は、（頷く）。

『どうにかして、それに対応してくるだろう。我々はそれをさせる前に、奴を止めるだけだ……：エインが命をかけて、魔法陣を発動させたからな。そして今も他の者達が、魔法陣を完璧に発動させようとしている』

そう、エイン達が、ディアブナスの動きを止める魔法陣を発動させている。

この隙にどうにかしなければならぬのだ。

『ああ、そうだな。が、その前に、奴の魔力の流れを我も見てこよう。ここを離れるぞ』

「私も見てこよう」

エンの言葉にユイゴが頷き、レンの元へと向かった。

ユイゴは戦いに活かすために向かったのだろうが、エンのあの顔。

あれは、ただただ見てみたいという気持ちの方が大きい気がする。まったくこんな時に。

レンの元にエンが着くと、少しの会話の後レンがニッコリ笑い、エンとユイゴの手を握った。

そしてディアブナスを見た後、レンの方を見てニヤニヤしているエン。奴にもすっかりと、ディ

アブナスから魔力が漏れているのが見えたのだろう。

我はディアブナスに攻撃を放つ。

それは奴の張った結界に当たり、結界は攻撃によりすぐに破れた。しかしすぐに結界を張り直すディアブナス。

さて、総攻撃をかければ、今のディアブナスは倒れるだろうか。いや、簡単なようで簡単ではないだろう。

……：奴が気づくのも時間の問題。確かにその通りだ。

ならば奴はそれをどう解決する？ またレンやブローを狙い、さらなる力を手に入れようとするだろうか。

まずはとりあえず、魔法陣が不完全とはいえ、それでもふらふらと動く、奴の動きを封じたいところだ。

エン達が戻ってきて、再びディアブナスに攻撃を始める。

「しゅの！ がんばっちゃえ!!」

『そこだ！ やっちゃえ!!』

『下がってるなの!! 頑張れなの!!』

結界のおかげで、動きの悪いディアブナスを、少しでもレン達から引き離しながら、攻撃を加えていく。

どうにか、どうにか今のうちに、奴を!!

◇ ◇ ◇

『まったく、何をやってるんだろうね。こんなに時間がかかって、まさかやられたんじゃ？ でもそれならここはもう、あいつに支配されているはずだし……何とか止めてるってところかな?』

僕、カースは、そう独り言を零す。

すると、森に住んでいる魔獣達が話しかけてきた。

『ひゅいひゅい、ひゅい?』

『ん? ああ、ごめんごめん。ちょっと考え事をしてたんだよ』

『フヒフヒ?』

『そう、ここから旅立った、あの一人と二匹のことを考えてたんだよ。まったく、しっかり守るだなんて言うておいて、ここまで闇が広がってきてるじゃないか。不甲斐ないったらないよ』
ディアブナスが復活したのには、僕も気づいている。

そしてその気配が、スノーラとレン、ルリがいる街に向かっているのも。

スノーラもいるし、すぐにディアブナスをまた封印すると思っただけけど……どうやら時間がかかっているみたいだ。

『きゅびい! きゅび?』

『みんな、レン達のこと心配かい?』

『ひゅびい!』

『きぎい!』

『フヒフヒ!』

『そうだね、君達はレン達が大好きだったからね。心配だよね』

『きゅび!』

『え? 僕が?』

『きぎい!』

『うくん、僕は、戦闘は苦手なんだよね。ああいうのはスノーラの仕事で……、って、イテテ、突かないで! それに嘔まさないで! ああ、もう! 分かったよ。ちょっと様子を見てくるから、みんなはここから出ちゃいけないよ。ここは僕が結界を張っているからまだ安全だけど、外はもうかなり危ないからね』

『ひゅいひゅい!』

『きゅびっ!』

はあ、ここからスノーラ達がいる街まで、どのくらいで着くか。闇がこの辺りを包み始めてからだいぶ経つ。

いつも通り飛んだら一〜二日。

それだと間に合わないかもしれないから、久しぶりに本気を出さないとイケないかな。

僕が本気を出せば、スノーラよりも速く移動ができる。スノーラ達の住む街まで、一日もかからずに着くだろう。

いや、さらに力を使えば……。

はあ、全部が終わったら、スノーラに何かしてもらおう。スノーラが解決してくれていたら、何も問題はなかったんだから。

まあ、仕方ないのかもしれないけどね。相手はあのディアブナスだ。

僕が行って、何ができるかは分からないけれど、この森に住む魔獣達は必ず守らないと。僕の家族なんだから。

僕は空へと舞い上がった。

◇ ◇ ◇

『凄いなレン！』

『ぜんぜん止まんないなの！』

『お父さん頑張れ!!』

『僕も一緒に、えい！ 闇魔法！』

「がんばりえ!!」

スノーラがドラゴンお父さん達の所へ行つてすぐ、今度はドラゴンお父さんとユイゴさんが、僕の所に来たんだ。ディアブナスから漏れている、モヤモヤを見たいってね。

だから急いで二人と手を繋いで、スノーラ達の時みたいに魔力を流しました。

そうしたらドラゴンお父さん達も、しっかりモヤモヤが見えるようになったみたい。

ドラゴンお父さんは少しだけニヤツとした後、すぐにスノーラ達の所へ戻ったよ。

それからが凄かったんだ。

ずっと止まらずに、ディアブナスに攻撃をするスノーラ達。あまりにも速く動くから、僕達は途中でスノーラ達が見えなくなっちゃったほどです。スノーラ達が一瞬止まった時だけ見えるの。

ただディアブナスは、あれだけポロポロでよろよろなのに、スノーラ達の攻撃を避け続けて、攻撃が当たっても倒れません。しかも反撃までしてくるんだよ。

魔力は回復していないから、そのうち動けなくなるってブローは言ったけど……。

『あっ！ 腕取れた！』

ブローが言った通り、いきなりディアブナスの腕がポロツと取れました。

その取れた腕を拾わないで、さらにスノーラ達から離れようとするディアブナス。それを追いかけて攻撃を続けるスノーラ達。

『チッ!』

ディアブナスは久しぶりに、大きな攻撃をしてきました。

ディアブナスの頭の上に黒い丸が広がって、その中から次々に黒い球が飛んできたんだ。シュシュシュ!! って。

誰かを狙っている感じじゃなくて、あっちこつちにどこでもいいから攻撃するって感じにね。

それで少し下がったスノーラ達。

スノーラ達が離れると、その間にディアブナスは自分の腕を生やします。

さつきコレイションがやったみたいに細い腕じゃなくて、ちゃんとした腕だったよ。

『ふん、無理やり治したか。だがあれをすれば、かなりの力を使うからな。さらに動きが悪くなるが……それでもか』

『奴も必死なのだろう。だが気をつけろ、この後何があるか分からん』

また攻撃を再開するスノーラ達。

と、その瞬間、僕の足元に、僕とアイスを呑み込んだ、あの黒いドロドロ沼が現れたんだ。

急いでアーティストさんが助けてくれます。そしてドロドロ沼に光魔法で攻撃したら、ドロドロ沼はすぐに消えました。

「エイゴ様! レンを狙ってきています!」

「分かった!」

『まったくしつこいな。でもあいつの腕、どうして取れたんだろう? 誰かの攻撃が当たったのかな? 僕気がつかなかったよ』

『ね、変だったよね』

まさか腕が取れた原因と、ディアブナスの力が漏れていたことが関係しているなんて、その時の僕はぜんぜん気づいていませんでした。それはディアブナスが原因っていうよりも、ディアブナスの体が原因だったんだ。

『あつ、見てみて! コレイションが少し動いたよ!』

『あ〜! 本当だ!!』

『バディー!! コレイションが起きそう、やつつけて!』

『早く攻撃なの!!』

『ばでし、はやく!!』

『フンツ!!』

スノーラ達も気がついてたけど、今はディアブナスを倒すのを優先。

ディアブナスは腕が取れてから少しして、今度は片足も取れたんだ。新しい足がまた生えちゃったけど……。

今のディアブナスは、無理やり力を使っているみたいで、怪我の治りも速いです。でも無理やりのせいで、どんどん魔力はなくなっているみたい。

『大人しくしている!!』

バディーの攻撃で吹っ飛ぶコレイション。

でもコレイションの後ろの炎みたいな物が、コレイションを受け止めちゃって、さらに炎が大きくなると、バディーに攻撃してきました。

しかも炎が大きくなったら、コレイションのスピードが上がって、ハイエルフさん達が手伝いに来てくれたよ。

「おそらくディアブナスが無理やり力を使っているせいで、それがこっちの奴にも影響し、力を上げているんだろう。俺達も手伝う」

そんな話が聞こえてきたよ。

早くディアブナスの力なくならないかな。あれだけ力が漏れているのに、まだまだ動いているディアブナス。どれだけ力を持っていたの？ 早くなくなつて。

そうお願いをしながら、スノーラの応援をしました。でも……。

バディー達の頑張りも、コレイションを止めることはできずに、ついにコレイションはディアブナスの所へ行っちゃいました。

『おい、意識はどうだ?』

「先程よりも、しっかりとしています」

『そうか。お前の用意したこれは、役に立たなかったぞ』

「申し訳ありません。まさかここまで早く、ディアブナス様の力に耐えられなくなるとは」

『だが、代わりのいい器を見つけた。あれは取り込むのをやめようと思う。そのかわりあれを器にするぞ』

「あれとは……。ああ、あれですか。ですが動きが制限されるのでは?」

『確かに動きは制限されるだろうが、それ以上にあれだけの魔力の持ち主だ。私の魔力にも耐えられるだろう。もう時間がない、今から無理をしてもあの子供だけを狙う。お前は私が子供に近づけるよう、奴らの相手を』

「はっ!」

ボソボソ話をするディアブナス達。なんのことか分からなかったけど、絶対いいことじゃないよね。

それから、スノーラ達の声も少しだけ聞こえてきました。

ディアブナスは自分の力が漏れていることに気づいているとか、これからもっと攻撃を強めてくるぞって。

やっぱりさすがにディアブナスも、自分の力が漏れていることに気づいたみたいだよ。

アーティストさんが僕の前に、それからローレンスさんが後ろに立って、僕達のことを守ってくれます。

さつきみたいにまた、ドロドロ沼攻撃が来るかもしれないからね。せつかくあいつの精神から逃

げてきたんだから、もう捕まらないもん。

そう考えていたんだけど……それは間違っていたみたい。

また戦い始めたスノーラ達。

スノーラ達の言った通り、ディアブナスは今までよりもっと、激しい攻撃をしてきたよ。

それに復活しちゃったコレイションも、さらに強くなっていて、スノーラ達の攻撃を止めるから、なかなかディアブナスまで攻撃が届きません。

徐々にだけど、僕達の方へ近づいてくるディアブナス達。

今更隠れることはできないからね、とりあえず後ろに下がって。それからやっぱり時々来る、ドロドロ沼の攻撃を避けたり、他の攻撃を避けたり。

と、それは突然でした。

ドシャアアアッ!! ローレンスさんの後ろから凄いい音がして、振り向いたらそこには真っ黒の人型がいて、その黒い人型がローレンスさんを殴り飛ばしました。

「ぐああああ!!」

『ローレンス!!』

バディーが急いでこつちに来てくれて、黒い人型を倒そうとします。

でも続けて、ドシャッ!! ドシャシャッ!! ドシャッ!! 全部で八体も出てきちゃったんだ。

出てきた黒い人型達が僕達を囲んで、一斉に攻撃をってきます。

『アーティスト、そっちだ!』

「分かっている!」

ここに来てまた新しい攻撃。

あと少しで力が弱くなるって言うってたよね? あと少しはいつ? あれだけ力が漏れているのに、

まだ漏れ方が足りないの!?

僕は後ろを振り返ってディアブナスを見ます。

え?

振り向いたらディアブナスが僕を見ていて、それからニヤッと笑ったんだ。

何? まだ余裕があるって言いたいのか?

すぐにスノーラ達の攻撃で、僕の方を見ることはやめたけど、何か気持ち悪いニヤッだった。

僕は前を向いて、ハリセンを握ります。大丈夫、後どれくらいかの少しは分からないけど、みんながいてくれるから大丈夫。

でもそんな中、また次の攻撃が僕達を襲ってきます。

僕の足元に小さな今までに見たことがない魔法陣が現れたんだ。それと同時にドラゴンお父さんが叫びました。

『まずい!! その魔法陣から離れる!!』

その声で、ルリ達も気づいたみたい。

『レン、逃げる!!』

『こっちに行くなの!!』

『こっちこっち！ みんな乗せて飛べるかな!?』

『早く早く!』

みんな逃げようとしたら、バディーがこっちに來てくれました。

それで、ルリ達を背中に乗せて、僕を唾くわえて、その場からジャンプしたんだ。

僕が魔法陣から離れると、魔法陣も消えます。

でもバディーが着地した途端、僕とバディーの下にはまた魔法陣が現れました。

それを何回かしたら、魔法陣がなくなつたの。

でも今度は、ローレンスさんを殴り飛ばした、あの黒い人型が何体も現れて、みんなを攻撃し始

めたんだ。

そのせいで、僕とバディーは離れちゃった。

スノーラが来てくれようとしたんだけど、ディアブナスの攻撃が激しすぎて來られません。

あっ、ただ、ドラゴンお父さんのおかげで、ディアブナスがしようとしていることが分かつたよ。

ドラゴンお父さんがみんなに言つたんだ。

『レンを取り込もうとしているんじゃない、器にしようとしているんだ』

って。

ディアブナスはさつき、腕と足が取れたでしょう？ それにずっと魔力が漏れています。

アレは今のディアブナスの力に、生贄いけにえになったラジミールの体が耐えられなくて、そうなんだじゃないかって。もうすぐあのラジミールの体は壊れちゃうみたいですよ。

器がなくても、力を使えるけれど、実体があつた方が、さらに力が強くなるみたい。

封印の魔法陣も不完全とはいえ発動しているから、それに対応するために、新しい体が欲しくて、新たな器として、僕を選んだんじゃないかな。

ディアブナスは僕を取り込むつもりで誘拐とかしてきてたけど、今度は器？

僕、絶対に嫌だよ。

だから僕は、立ち止まらずに、なんとか逃げ続けています。

ルリ達とは途中で合流して、一緒に逃げてくれていたんだ。

でも少しして、何体も出てきた黒い人型に挟まれちゃいました。

『レン、僕達ハリセン攻撃!』

『魔法できないけど、ハリセン攻撃はできるなの!』

『よし、僕もハリセン攻撃だ。さつき僕は攻撃できなかったからね、今度は頑張るよ!』

『僕は闇魔法で奴らを止めるよ! それでレン達がハリセンで攻撃して!』

ルリ、アイス、ドラちゃん、ブローがそう言うので、僕は頷きます。



「こげき!!」

近くにいた方の黒い人型を、まずはブローが闇魔法で抑えてくれます。

それで動けない黒い人型の頭を、ルリとルリに運んでもらったアイスが攻撃。ドラちゃんは肩と脇腹を攻撃。僕は足を攻撃しました。

しっかりと決まったハリセン攻撃。

叩いた部分から黒い光が溢れ出して、黒い人型はそのまま消えていきます。

よし、ハリセンが使える!!

確認した僕達は、何とか自分達の方に来る黒い人型を消していきます。

でもね、気がついた時には、最初よりも黒い人型が増えていたんだ。

僕達を囲んでいるせいで、スノーラ達の姿も、バディー、ローレンスさんの姿も見えなくなっていました。

『これ以上は僕達には無理！ 僕が抑えているうちに、あっちに逃げよう!』

『やっぱり僕が飛んだ方がいいかも。あそこのまだ少しは人型が少ない所まで逃げたら、僕がレンを掴んで飛ぶから。みんなはレンの肩や頭に乗って!』

ブローが悲鳴を上げたら、ドラちゃんがそう言いました。

ドラちゃんが僕の肩の部分の洋服を掴んで、ルリとアイスが急いで僕の頭の上に乗って、ブローはドラちゃんの頭に乗って、すぐにドラちゃんが飛んでくれました。

『ごめん、今の僕だとこの高さまでしか飛べないみたい。もう少し飛べると思ったんだけど』

『いいよ、あいつらより高いから。あいつら飛べないみたいだからね』

ブローがホツとした感じでそう言ったよ。

僕達は今、黒い人型三人分の高さくらいの所を、ふわふわ飛んでいます。

ふう、これで少しゆっくりにできる。ドラちゃんありがとう。

僕は、やっと周りを確認です。

黒い人型が多いのは、バディー達の所。スノーラ達の所にも何体かいて、スノーラ達の攻撃を、

コレイションと一緒に邪魔しています。

『あ、集まってきた！』

『向こうに行こう！』

確認をしていたら、飛んでいる僕達の下に、黒い人型が集まってきてウヨウヨし始めたから、別の場所に移動します。

そうしたら黒い人型もついてきて、また離れて……何回もその繰り返しになりました。

でもね、それがよかったみたい。

他の所にいた黒い人型も、飛ぶ僕達を見てどンドンこっちに集まってきたから、バディー達が戦いやすくなつてたんだ。

うん、それはよかつたんだけど。

『まずいよ！ あつ！ あぶない!!』

ブローがそう言った直後、集まっていた黒い人型全部が混ざり合つて、一つの大きな黒い人型になつたんだ。

大きな黒い人型は、僕達に闇魔法の攻撃をしてきて、吹き飛ばされて僕達はバラバラになります。地面に倒れているうちに、僕は大きな黒い人型に捕まっちゃいました。

そしてすぐに、僕とその大きな黒い人型の下に魔法陣が現れました。

飛ばされた時の衝撃でちよつとボケツとしていた僕。

頭をフルフルと振つて顔を上げたら、向こうにディアブナスのニヤツと笑う顔が見えて、それからスノーラ達の、僕を呼ぶ声が聞こえました。

『レン！ くそ、こいつら邪魔だ!』

スノーラ達はこっちに来られないみたい。

『レン、離して!!』

『離すなの!!』

『レンを離してよ！ えい！ もう！ 闇魔法弾くなんて嫌なやつ！ えい！ えい!』

そしたら、ルリ達が僕の方に来てくれました。

そしてみんなで、僕を捕まえている大きな黒い人型を攻撃してくれます。

僕もなんとかハリセン攻撃をと思ったんだけど、大きな手で掴まれていて、自由に腕が動かさま

せん。

さつき僕を見てニヤツと笑っていたディアブナスは、今は笑うのをやめています。目を閉じてるんだ。

そんなディアブナスに攻撃するスノーラ達。でも目を閉じているのに、スノーラ達の攻撃が当たりません。と、ここで魔法陣に変化が。

魔法陣の様相が、赤黒く光り始めたんだ。僕は光り出した魔法陣を見て、急いでドラちゃんにお願ひしました。

「どりゃちゃー！ りゆりとあいしゅ、ちゅれちえ、にげちえ！」

『ダメ！ 今ハリセンで攻撃してる！ これ消す!!』

『みんなで攻撃、大丈夫なの!』

「にげちえ！ まほじんひかつちえりゅ！ あぶにゃい!!」

きつとディアブナスは、今にも僕を器にしようとしているんだ。それで魔法陣が光ってるんだと思う。

もし魔法陣が発動して、みんなも巻き込まれたら？

みんなの力もついでに吸い取られて、その強くなった力でスノーラ達を攻撃されたら？

そんなの嫌でしょう？

それに今、スノーラ達は僕を助けようと、一生懸命いっしょうけんめい僕の所に来てくれようとしています。

そのための攻撃が、もしルリ達に当たったりしたら？ そうなるかもって、スノーラが動きにくくなるかも。

それはダメだよ。

もちろん、ルリ達が怪我するのもダメ。

僕はルリ達に、何度も逃げてって言います。

それでも一生懸命、ハリセンで大きな黒い人型を攻撃するルリ達。

ハリセンが当たったところは、しっかりと削れるから効いているんだらうけど、すぐに元に戻っちゃうんだ。

その時、ブローが攻撃を止めて、ルリ達の方に行きました。

『逃げるよ』

もちろんルリ達は嫌だって言います。

『レン助ける!』

『置いていかないの!』

『レンの言う通りだよ。今、みんなが助けようとしてくれる。僕達が邪魔になる可能性があるなら、レンのためにも、みんなのためにも、今は離れていた方がいいよ。僕は残って、これ以上闇が纏わりつかないようにするから』

顔を見合わせるルリ達。

ブローがもう一度『ね?』って言ったら、ルリ達が僕の方をしっかりと見てきます。

『僕、向こうで待ってる』

『ボクもなの』

『うん!』

大丈夫、絶対スノーラが助けてくれるから。

ルリとアイスが最後に一発ずつハリセン攻撃をして、ドラちゃんの背中に乗せてもらって、向こうへ飛んでいきます。

途中で何回も振り返って、僕を見てきて。

僕はルリ達が向こうに行くまで、ずっと笑っていたよ。

ルリ達と合流したスノーラ達は、何かを話した後。コレイションを攻撃しながら、僕の方へ来てくれます。

僕も一生懸命、手を出そうとしているよ。

『これでもくらえ!!』

スノーラとドラゴンお父さんの合わせ技が炸裂!!

コレイションの体にしっかりと当たって、コレイションが飛ばされました。

でもすぐに立ち上がって、よく見たら洋服は少しボロボロになっていたけど、全然怪我はしていません。

『身体強化を最大までかけたか。皆、攻撃を集中しろ!! スノーラ! お前はレンの元へ行くことだけ考えろ!!』

ドラゴンお父さんの合図で、次の攻撃がまた、コレイションにしっかりと命中して、コレイションがさっきよりも吹き飛んだよ。

『レン!!』

スノーラが僕の方へ走ってきます。

それで、いつものヒュンツ! って見えない動きで、一瞬で僕の目の前に来たスノーラ。でも次の瞬間、スノーラが何かに弾かれて少し後ろに下がりました。

ブローがすぐに確認。

僕達の後ろには何もなかったんだけど、前にだけ見えない結界みたいなものがあるって。

スノーラが急いで後ろに回ります。でもまた弾かれて、ブローが前と横を確認。前には何もなくなっていました。

どうもスノーラが行く方行く方に、見えない結界が出るみたい。

チツ! と舌打ちをしたスノーラ。

見えない結界を無理やり攻撃しようとしたら弾かれちゃって、スノーラの体にビリビリ雷みたい

なものが襲いかかりました。

「しゅの!？」

『くっ!』

スノーラが弾かれた瞬間、僕達の周りをさらに何体もの、大きい黒い人型が囲みました。

と、同時に、ディアブナスが僕の方に飛んでくるのが見えました。

僕は急いで、ブローに逃げてつて言います。

ブローは凄く嫌そうな顔をしたけど、すぐにルリ達の所に行ってくれました。

そしてブローが向こうへ行つてすぐ、ディアブナスが僕の隣に浮かんで、みんなを見渡しました。

ブローを見て、スノーラ達を見て、それから僕を見て。

スノーラが来てくれようとするんだけど、あの動く結界に邪魔されて来られません。

『ようやく準備が整った。お前はこれから私の新たな器として、私を受け入れるのだ』

僕はディアブナスを睨むけど、ディアブナスは気にせずに僕の頭に手を置きました。

『復活できたのはよかったが、まさかここまで、予定通りに動けないとは』

ディアブナスが話している時でした。

ぼろっとディアブナスの片足が取れたんだ。それから顔、ほっぺの部分がちりちりつて剥がれてきて、剥がれた皮膚がサラサラ、風に乗って消えていきます。

『スノーラ、逃げ!』

『分かってる!』

向こうからドラゴンお父さんとスノーラの声が聞こえるけど、振り向くことができません。

ディアブナスが僕の頭に手を置いてから、僕、動けなくなっちゃったんだよ。

それに……。

ディアブナスは精神世界で、僕とブローを取り込もうとしていたでしょう? あの世界は本当に気持ち悪かったんだけど、今の感覚は、もっと気持ち悪い感じがするの。あの世界は本当に

そんな僕の様子を無視して、ディアブナスがまだ話してます。

『だがお前を新たな器にすれば……お前の力はかなりのものだからな。私の力にも耐えられ、さらにはお前の力までも、手に入れることができる。お前は小さすぎるから、動きは制限されるだろうが……お前のその力があれば、そんなもの大した問題ではない』

『スノーラ、助けて!!』

『助けてなの!!』

ルリ達の声? 何かとつても遠くに聞こえる。

それにルリ達よりも近くにいるスノーラの声は、もっと遠くに感じる。

何か変な感じだよ。

ディアブナスの、僕の頭に乗せている手から、ブワツと黒いモヤが出てきました。

このモヤモヤはダメな気がする。

ハリセンを使って抵抗できれば、体をディアブナスに取られちゃうまで時間を稼いで、その間にスノーラが助けに来てくれるかな？

僕の腕動いて！ お願ひ！！

僕はどうなってもいいけど、ここには大好きなみんながいるんだよ。

新しい僕の家族がいるんだよ。

僕、ここに来て、家族ができてとっても嬉しかったんだ。

僕が体に乗っ取られて、僕の手でみんなを攻撃されたら――

そんなの嫌だよ。だからお願ひ！ 腕動いて！！

でも僕の思いとは裏腹に、腕は動きませんでした。それどころかさつきから、体から力が抜けていく感覚がします。

それに頭がふらふらする感じもしてきたよ。

お願ひ、僕、スノーラ達には幸せでいてほしいんだ。

スノーラは前に大切な人がいなくなっちゃって。

ルリもアイスも、他のみんなもクレイション、ディアブナスに傷つけられて。

みんなにはこれ以上傷ついてほしくないんだよ。

「で、うごかしゅ」

『何だ、まだ意識があるのか。ふんっ、もうかなり私の力を注いでいるはずだが』

「はりしえん、ちゅかう」

『はりしえん？ お前達が使っている、見たことのない武器のことか？ 確かにかなり使えるようだな。今の私の状態は、お前達のその武器のせいだからな。クレイション！！』

「はっ！！」

『これから私は、この者の中へ入る。すぐに終わるが、その瞬間を狙われると面倒だ。しっかり奴らを抑えておけ』

そう言っつて、スノーラ達がいるだろう方を見ます。

お願ひ動いて！ それでハリセンで攻撃するの！

でもその瞬間、ブワツと、ドロツとしたものが、僕の中に入ってくる感覚がして、目の前が暗くなってきました。

視界のはじから、どんどん黒に染まってくる感じです。

それから遠くの方で、スノーラやルリ、アイスの声が聞こえた気がしました。

ごめんねスノーラ、ルリ、アイス。このまま体に乗っ取られたら、みんなを確実に傷つけちゃう。本当にごめんね。

僕はそっと目を閉じました。

その時……。

『何だ!? どこから現れた!! くそおおおお! ふざけるなあああ!!』

ディアブナスの怒鳴り声が聞こえたんだ。

でもおかしいの。さっきまで目の前でディアブナスは話していたのに、今の怒鳴り声は遠くで聞こえたんだ。

それからブワツとしたドロドロとした感じも、僕の体から出て行った感覚がありました。

それに、僕の頭を押さえていた、ディアブナスの手の感触もなくなりました。

それに体がとつてもスツキリした気がして、腕を動かしてみたら軽く動いたよ。

でも……。色々とスツキリしたし、軽くなつて腕も動かせるようになったけど、背中に何か、掴まれている感覚が。

それから僕の周りを、風がかなりの勢いで吹き抜ける感じがしています。

『これ、一体どんな状況なの？　なんでこんな危ない状況になつてるのさ』

え？　この声？

目をそつと開ける僕。

見えたのはディアブナスでも、スノーラ達でも、ユイゴさん達でもありません。

それどころか誰も僕の前にはいません。見えているのは街の風景。

え？　と思いつながらさらに周りを確認しようとした僕。

でもまたあの声が聞こえて。

『本当にギリギリだったよ。なんであんな状況になつてるのさ』

バツ!!　と見上げる僕。

そこには大きなカラス——魔獣姿のカースが、僕を掴んで飛んでいました。

◇◇◇

『イテテテ、久しぶりに本気を出したから、距離を見誤つたね』

周りを確認しようと、この辺りで一番大きな木に止まろうとしたら、僕、カースは行きすぎて、枝に顔をぶつけてしまった。

はあ、これで何回目だろう。

だんだんと感覚が戻ってきて、ぶつかる回数は減ったけどね。

森を出てから数時間、僕はもう街の近くまで来ていた。

うん、やっぱり僕が本気を出せば、こんなものだ。

ただ……。この状況はまずいね。街へ近づくとつれて、闇の力がかなり強くなってきてる。

今では周りの気配が分からないほどに、闇が全てを覆ってしまっている。

まったく、前にディアブナスが現れたあの頃のようにだ。いや、あの頃よりも悪い状況かな。

はあ、まったく。マサキが命をかけて封印したのに、誰がその封印を解いたのか。

奴が世界を支配すれば、この世界なんてすぐになくなってしまふ。そんなこと分かつてはす

だろうに。

そうまでして奴を復活させ、何がしたいのか。

ディアブナスがここまで力を取り戻しているなら、スノーラだけでは止められそうにないか。でも、ディアブナスがああ街にとどまっているということは、他にも何かあるのかな？

僕は再び動き出す。

『確かまっすぐに進んで右に少し曲がって、それからまたまっすぐ？ いやあ、久しぶりに森から出たから記憶がねえ。ん？ あれは……』

向こうの方に街が見えてきた。

記憶通り、スノーラ達が向かった街だ。

その街はどこよりも闇の力を強く感じる。

あの街に奴、ディアブナスがいることは間違いないだろう。

それにしても、街を覆っている結界と、それに群がる魔獣達。

街を守っている結界からは、さまざまな力を感じる。

どうも僕が思っていたよりもかなりの人数で、ディアブナスに対抗しているみたいだ。

大勢の者達で張られている、街を守る結界。そしてその結界を張るための魔法陣。

それは昔、結果としては失敗してしまった魔法陣でもあるけれど、それでも一度はディアブナス

を封印した魔法陣だ。

確かにあれで止めておくのはいい考えだね。

ただ、いくらスノーラ達でも、ディアブナスの相手をしながら、この魔法陣を発動させたとは思えない。

しかもよく見れば、まだ魔法陣は不完全だ。

誰かが何とか発動させたけど、全然魔力が足りていないって感じかな。

うくん、そうだね。着いたら僕は魔法陣の方に行こうかな？ まずは魔法陣を完成させることが大事だろう。

それと、どこから入ろうか。

せっかくの結界だ。僕が中へ入るために穴を開けて、そこから魔獣が入ったら、結界を張った者達に文句を言われそうだよ。

その辺からヒョイと入れてくれないかな？

なんて考えているうちに、僕は街の中心の上空に着いた。

うくん、本当にどこから入ろうか。

と、あれはハイエルフか？

そうか、彼らが来てくれていたんだね。だからここまでもったのか。

さてさて、ディアブナスはどこだろうね。

……おっ、あれか。あいかわらずの禍々まがまがしい力だね。
ん？ おいおい、何をやっているんだ！

レンが捕まってるじゃないか！ しかも、ディアブナスに頭を掴まれてる！

僕は急いで結界の中に入れそうな場所を探す。

僕が中へ入れば、あそこまでは一瞬で着く。

ハイエルフ達には悪いけど、彼らの結界に穴を……。

そう思っている時だった。

たまたま魔獣達が結界に穴を開けている所を見つけた。

結界は何度も修復しているようだけど、あそこはどこよりも、弱くなっていたみたいだ。

ちょうどいい、あそこから入らせてもらおう。そして全速力であの子の所に行かなきゃ。

僕は穴の開いた方へ向かう。

あまり速く飛ぶと中に入れずに通り過ぎることになるから、ここだけは普通に飛んだ。

そうして次々に、街に入ろうとする魔獣達をささっと倒しながら、結界の中へ入って、次の瞬間——結界が修復された。

危ない危ない、ギリギリだった。

近くにいたハイエルフ達と目が合う。

でも僕が誰かすぐに分かったようで、攻撃をされることはなかった。

僕は一直線に、あの子の所へ向かう。

一瞬だ。僕はそれだけ速く飛べるのだから。

ディアブナスに僕の気配がバレていなければ、一瞬で助けることができる。

スノーラのためにも、スノーラの家族を助けないと。

彼が悲しみの中で生きるのは、もう見たくないからね。もちろん後でお礼はしてもらおうけど。

見えた！ よし、気づいていない！ 今だ！！

◇ ◇ ◇

『レン、久しぶりだね。まさかこんな再会になるとは思っていなかったけど。それでさ、どうしてあんなことになってたの？ あっ、とりあえずスノーラ達の方へ行つた方がいいか』

本当にカース？

だってカースは、スノーラがいなくなったあの森を、守っているはずだよね？

それになんで僕は、カースに掴まれて飛んでいるの？

もうね、聞きたいことがいっぱいいる僕。

カースはカースで、スノーラの方を見て、すぐに飛んでいこうとしたんだけど、その時でした。ポトツだかベチヨだか、変な音が聞こえて、スノーラがそつちを見ました。

僕も急いで同じ方を見ます。

僕達の斜め下の方にディアブナスが見えて、僕達は外の結界とディアブナスの、ちょうど中間くらいを飛んでいました。

スノーラはさつきまでと一緒で、僕の方へ来てくれようとしていて、でもやっぱりあの動く結界みたいな物に邪魔されていました。

それで、その変な音は、ディアブナスの方からだったよ。

腕と残りの足が完璧に取れて、その音だったみたい。

と、それを見て考えた僕は、すぐにカースに言いました。

「もつちよ、ちよんで！」

『ん？ 何？』

「もつちよお、ちよ、ん、じえ!!」

『ああ、もつと飛んで？』

そうそう、当たり前！

あの時、カースが僕を助けてくれた時、それまでカースがいるなんて気がつきませんでした。今もスノーラ達は、なんでカースが、つて感じで、こつちを見ているし。

だから誰もカースに気づいていなかったんじゃないかな。

つてことは、あの邪魔する動く結界も、カースには反応してなかったってことでしょうか？

なんで気づかれていないのかとか、そもそもなんでいるのかとか、カースには聞きたいことがいっぱい。

でもそれを聞いていたら時間がない。

「びゅっ!! おりりゅ!!」

『え?』

もう！ 時間がないんだよ。お願い、僕の話わかって！

もう一回話そうとする僕、その時僕の横に黒い丸ができて、そこからブローが出てきました。

あのトンネル魔法でブローが来てくれたの。

あっ、ブローは僕の言葉わかるよね。ブローに伝えてもらおう！

僕の所に来たブローは、何か言おうとしたんだけど、それよりも前に僕が話し始めて、ちよつとびつくりしていたよ。

「うえちよんで、びゅっ!! おりりゅ!!」

『上に飛んで、ビュッと降る?』

「かーしゅ、とびゅのはやいはじゅ、だからびゅつておりりゅ！」

『カースは飛ぶのが速いはず、だからビュッと降るの?』

「ぼく、はりしえんでこげき！ でいにやぶにやしゅ、ぼりよぼりよ。いまこげき！」

『僕はハリセンで攻撃。ディアブナスは今ポロポロだから今攻撃……つて、そっかあ、なるほど。』

この魔獣、いきなり現れたもんね。しかもあいつの魔法で止められないほど、速く飛んでるし。うん、それどころか、気配を察知されないほどの速さで、飛んでるっばいし。ねえねえ、カースって言うの？ 僕はブローだよ』

ブローが今の話をもう一回、ささっとカースに伝えてくれます。それで話を聞いたカースは、ちよつと嫌そうな顔をしました。

『そうだよ、僕はカース。それでレンの作戦だけど、やってもいいけど、スノーラに後でなんて言われるか』

「いっちなえ!!」

『行っただって。僕もそう思う、確かに今のうちに攻撃するのがいいよ』

僕の言葉に、ブローがそう言ってくれます。

『はあ、やつぱり来るんじゃないかな？ でも仕方ない、あれは放っておけないからね。レンに結界を張るよ。どんなに速く動いても、体に影響がないようにね』
すぐに僕の体が少しだけ光りました。

これがカースの結界だって。ブローも一緒に光っています。

『よし、じゃあ一旦、結界ギリギリまで飛ぶよ。その後のことだけど……』

そう前置きして、カースは説明してくれます。

上まで行ったら、すぐに下に降りてくれるそうです。

でもすぐにはディアブナスの所には行きません。ちよつと周りを飛んでタイミングをズラすって。どうしてって思っていたら、スノーラよりも速く動けるカース。さつきも気配を気づかれないほど、お邪魔結界が間に合わないほど、速く飛んできてくれたけど、今はカースがいることを、ディアブナスがしっかりと把握はあくしています。

いくら気配に気づかれない速さで飛んでも、何かの拍子に気づかれたら？ だからすぐに降りないで、タイミングをズラすんだって。

それから、ブローがハリセンについてもカースに教えてくれました。

『そうか、そう使うんだね。よし！ じゃあレン。僕は本当にスノーラよりも速いからね。レンが思っているよりもすぐにディアブナスの所に着くはずだ。だからハリセンを使うタイミングは僕が教えるよ。今だ、って僕が言ったら、思いつきハリセンで叩くんだ。いいね』

「うん!!」

『じゃあ行くよ!』

そうカースが言った瞬間、僕達は外の結界ギリギリにいました。

◇ ◇ ◇

なぜだ！ 奴はどこから現れた。